

## 伝統の日本、マンガの日本

人文学研究科、油井清光教授

### 1. 「日本研究」のゆくえ

世界の「日本研究」はいまどこへ行こうとしているのか。

「日本研究」の対象としての、伝統の日本とマンガの日本とはどんな「関係」にあるのか？

日本のマンガやアニメが世界中で強い存在感をもっている——これは今や誰もが知っている。

分かりやすい数字：パリ「ジャパン・エキスポ」20万人、ルッカ「マンガ・フェスティバル」21万人、ロサンゼルス「アニメ・エキスポ」12.5万人、ニューヨーク「コミコン」10万5千人、バルセロナ「サロン・デル・マンガ」7万人、サンパウロ「アニメ・フレンズ」13万人、ニューデリー、モスクワ、ローマ、ブタペスト

日本のコミケット（50万人）

15年ほど前から、本格的に日本マンガやアニメの海外での受容、グローバル化の様相、について調査研究してきた。

3年前からは、日本学術振興会と文部科学省の助成金で、「国際共同に基づく日本研究推進事業」（日本サブカルチャー研究の世界的展開—学術的深化と戦略的な成果発信）という研究プロジェクトを立ち上げ研究を進めてきた。2010年に「日本サブカルチャー研究会」を創立した（サイト参照）。海外パートナー機関：パリ政治学院（「ヨーロッパ・マンガ学会」との連携）、イェール大学文化社会学センター、香港大学グローバル創造産業学科、北京大学文化産業研究所、など。

杭州（中国）、香港、台湾などの現地で実態調査（質問紙調査）にあたってきた。

2012年に、マンガ・アニメの世界学会を開催した。「マンガ・ワールズ—サブカルチャー、日本、ジャパノロジー」（ポスター参照）。世界中から、日本マンガやアニメの若手研究者が集まった。

日本のマンガやアニメは日本の「先端文化」とすると共に、世界の（グローバルな意味での）先端文化でもある。そのようなものとして、（立派な）学問の対象でなければならない。

### 2. 日本人の日本研究者と外国人の日本研究者とはどう「連帯」しえるのか？

この秋から、「国際共同による日本研究の革新—海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成」（日本学術振興会）をはじめた。では、世界の（海外の）日本研究者は、マンガやアニメをどう捉えているのか。若手の一部の熱心な研究者と、大御所との「溝」？

この問題をめぐって、日本人の日本研究者と外国人の日本研究者との関係は、ではどうなっているのか。

日本人の日本研究者の中で、マンガやアニメの研究を学問の対象とする人と、伝統的な研究中心であるべきだとする人たち。

すると、日本人でマンガやアニメの研究を学問の対象とする人と、外国人でマンガやアニメの研究を学問の対象とする人とが連携し、他方で、伝統的な対象を守るべきだという日本人と外国人が連帯する？

あまり将来性のある構図とは思えない。

むしろ、伝統と先端との連携が必要！

伝統的日本文化研究（古典文学、日本歴史、言語学など）と、先端文化研究とが互いに刺激しあう関係。日本文化の古典的な研究も再活性化され、世界中の日本研究が全体として活発化する方向。先端日本文化研究を刺激材料あるいは触媒にして。

人文社会科学的な発想や手法と理系的な発想や手法との融合；11月1日、神戸大学において「アジア主要大学日本研究センター長フォーラム——アジアにおける日本研究の過去・現在・未来」

が開催された。そこに来ていた、シンガポールの南洋理工大学の先生（実験心理学が専門）が、マンガ・アニメなどの画像を見ているときに脳が活発化する部位の研究があることを披歴された。また、社会学では、現代社会における人々の「連帯」に影響するヴィジュアルな側面の研究が発展してきている。「ヴィジュアル・ターン」（Jeffrey Alexander, Yale 大学）。

現代社会の「ヴィジュアル・ターン」を共通の視点とした文理融合の研究が考えられる。

最後に、12月14日ー15日両日に、神戸大学主催で、IACCI（国際文化創造産業学会）第6回世界会議を開催する。